会議録

会議の名称	令和５年度　第２回座間市学校施設適正化方針検討委員会		
開 催 日 時	令和　５年　６月　２９日（月）　１４時００分～１６時３０分		
開 催 場 所	市役所５階　５－４会議室		
出　席　者	山森委員長、天野副委員長、松尾委員、小宮委員、牧野委員、窪委員、河野委員、川畑委員、木島教育長		
事　務　局	安藤教育部長、高木教育総務課長、野澤就学支援課長、東保健給食担当課長、下斗米教育指導課長、石田教育研究所長、清水学校施設係長		
会議の公開可否	■公開　□一部公開　□非公開	傍聴者数	０人
非公開又は一部公開とした理由	―		
議　　題	１　座間市立小学校の水泳指導に使用するプールについて ２　座間市立小・中学校の給食について ３　座間市立小・中学校の児童生徒数・学級数の将来予測について ４　座間市立小・中学校の適正規模・適正配置の考え方について		
資料の名称	資料１　プールについて 資料２　給食について 資料３　児童生徒数・学級数の将来予測 資料４　適正規模・適正配置の考え方（学校規模・通学距離等の基準の検討） 参考資料　公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引 ～少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて～		

議事の詳細
（○委員の発言、●事務局の発言） 議題１　プールについて ・事務局から資料１に基づき、詳細な内容の説明 ○民間のプールは、季節を問わず実施できる点が良いと思う。資料の市立プール利用者数について、一般利用者の内訳が知りたい。 ●市立プールの一般利用者の内訳は把握できていない。 ○プールの改修工事は、新しくするのではなく「使えるように戻す」という感覚がある。改修を積み重ねても新しくはならず、年数的に使わなくてもいいのではないかと思うものもある。一般開放日は２０日程度で費用対効果的に難しく、民間に移行するのが良いと思う。段階的な移行と書いてあるが、３０年後の話なのか、近々の話なのか。 ●施設の寿命が近づいている。また、学校間で授業環境に差が生じるのは好ましくないと考える。数年試行した後、問題が無ければ全校一斉に切り替えたい。 ○早めに対応する方が子どもたちにとって良いと思う。 ○市外の民間施設は使えないのか。市内の民間の２施設で全１１校の授業が実施できるのか。施設が改修で使えない場合は問題ないか。 ●現在の授業回数と同程度であれば可能とみている。市外の民間施設を利用する場合は、授業時間である２時間以内で往復できるところに限られる。何らかの理由で市内の民間プールが使えない場合は、市外の施設や当面の間は市立プールを使用する方法もある。 ○屋内プールになると、夏だけではなくて年間を通して授業ができるという解釈で良いか。 ●その通り。 ○基本的には賛成。プールまで歩いていくことは、子どもにも教職員にも負担になっている。座間小学校はプールまで遠く、低学年は途中で休まなければならず、プールに入れる

時間が少なくなってしまう。隣地にプールがある学校では、雨が降りそうな場合、「ダメなら戻ってくればいい」という運用ができるが、プールまで遠い学校の場合は、「行けない」となってしまう。長い距離を歩くことは身体の負担にもなるため、距離の問題が解決できるのは大きい。また、全天候型であれば予定通りにプール授業が実施でき、教職員にも子どもにも有難い。

○中学校は、教育課程の変更により体育の時間数が減った時から、プール授業は座学のみになった。話は変わるが、今後、市として屋内市立プールをつくる計画はないのか。

○社会体育施設としてのプールを求められることはあるかもしれないが、今の時点でそのような計画はない。

○以前から、屋内市立プールがないことを不思議に思っていた。屋内市立プールがあれば、昼は学校が利用し、夜は市民が利用できる。また、座間市の学校はなぜ敷地内にプールがないのか。屋外プールは、年間わずかしか使わない「もったいない・贅沢な」施設で一番良いのは屋内市立プールを造ることではないか。

○座間市が例外的ではなく、学校内にプールのない自治体は結構ある。また、改修を諦めるという例も出ている。最近では、函館市においてプールに移動するためのバスを運転手不足で確保できず、プール授業を実施しないという事例があった。

○先生方も全員水泳ができる訳ではないと思うので、民間施設を利用し、専門的な指導が受けられることは良いと思う。市立プールは、築何十年も経っており、栗原プールと同じように故障して使えなくなることが想像できる。使えなくなった市立プールを使う学校から移行していく方法もあるのではないか。また、アンケートでは、プールの管理について、学校の負担が少ないこと、の回答が多いが負担になっているのか。

○管理は市が行っており、学校の負担にはなっていない。

○安心した。また、市で大きな屋内プールを造る場合には、完成まで何年くらいかかるものなのか。

○基本構想・基本計画を作って２年、基本設計１年、実施設計１年、工事１年とし、およそ６年程度ではないか。

○その間に市立プールが壊れる可能性もあると思うので、民間プールに移行しつつ、大きな市立屋内プールができるようなら、その時変えていけば良い。

○民間プールを利用するのは経費面からも有利。しかし、民間は利益が減れば、閉鎖する可能性がある。このため、民間プールを利用しつつ、市が大きな市立プールを造った場合は、市立プールに移っていく。長い目で見ると、大きな市立プールを１つ造る方が良いと思う。

○現状の座間市のプール指導のあり方は、あまり良くないと思う。安全面、炎天下での屋外プール利用、プールサイドでのやけどのリスク等。それに加えて、更衣室の問題もある。男女で分けるにしても、それ以外の必要性も出てくる。民間施設の方が対応しやすい。あとは、水質・衛生面。プール槽を満たすには、水道料金がかかり、常にろ過だけしているわけではないと思う。コスト面、安全面、衛生面などでも、民間の方が良いのではないか。資料１に「今後の」とあるが、何年程度を想定しているのか。

●試行期間を２～３年設け、その後、問題がなければ全校で実施したい。

○確認したいのは、各学区にあるプールをどうするのかではなく、小学校の水泳指導の方向性ということで、本委員会としては、民間プールを利用しプール指導を実施するという結論で良いか。

○（一同）異議なし。

議題２　座間市立小・中学校の給食について
・事務局から資料２に基づき、詳細な内容の説明

○今後の方向性として、小学校給食を自校方式で検討するのはなぜか。給食センターを建てるのであれば、全校対応できると思う。コストが掛かる自校方式を継続したい理由を聞きたい。

●費用面ではセンター方式に一括集中した方が安いのではないかという話はある。自校方式では、３時間目あたりから給食のにおいがし、給食を取りに行く際は、栄養士の先生が声掛けし、子どもたちが答えを返すやり取りを行うことにより、残食が減る傾向があ

る。また、配膳室前では、壁新聞等で栄養士が生産者や食材の紹介をしている。自校方式ならではのきめ細かい食育指導を行っているのが座間市の特徴である。

○中学校給食の在り方についてのアンケートで保護者と教職員では全員喫食への考え方が違うが、これはアレルギーの話か。共働きが増えてきて保護者としては給食が良いというのが実際の話だろうが、管理が大変なのであれば、管理の問題であって給食センター方式にすることとは違う問題ではないかと考える。

○この委員会は学校施設の更新まで視野に入れており、小学校給食は自校方式を継続し給食室を残すか残さないかという方針が欲しい、という理解で良いか。

○今後の方向性は、小学校は自校方式、中学校に関してはセンター方式での整備の実現性を探るとあるが、センター方式は中学校のみが対象か、少し大きめにして小学校も対象にするのか。

●現在の中学校給食は、各校に給食として弁当を配達しているデリバリー方式である。この方式は、おかずが冷たいといった意見もあるので、中学校給食だけをセンター方式とし、温かい給食の提供を行いたいと考えている。

○小学校は、自校方式を継続して欲しいと思う。温かくておいしい。作る姿が見え、誰がこれを作ってくれているのかがわかる状況で、栄養士がいることにより食育として子どもに伝えられる。郷土料理や世界の料理も献立となり、幅広く様々な食を知ることができる。食に興味をもって、携わる人間になりたいというような幅も広がると考えている。座間市の子どもたちは、「おいしい」と言って食べるし、家に帰ってそれを伝えている。給食のおいしさや楽しさは人が成長する上で大切なのではないかと考えている。年１回保護者を対象に試食会を行っており、栄養士から保護者にも食の大切さを伝えているので、自校方式給食は幅広い意味で外せないものだと思う。コストは掛かるが、自校方式を進めて欲しい。

○座間の小学校の給食のおいしさは様々なところで伝わっているので、中学校でも自校方式を望む話が出ると思う。しかし、今の中学校に調理場を設けるのは厳しく、現実的には、センター方式であろう。近隣市でもセンター方式に変わる流れがある。

○小学校で自校方式は珍しいのか。

●県内１７市のうち、小学校は、１０市が自校方式、自校方式/センター方式併用が５市、センター方式のみが２市。中学校は、自校方式は１市もなく、７市がセンター方式、７市がデリバリー方式、センター/デリバリー併用型が１市、ミルク給食が２市。この２市は平塚と茅ヶ崎だが、再来年には平塚がセンター方式、茅ヶ崎がデリバリー方式になる。

○教員のアンケート結果は、アレルギー対応のほか、給食の方が準備や片付けに時間がかかるので教育課程を変えなければならない懸念による。現在の座間市の中学校では、４時間授業を行って１３時近くに昼食だが、給食の場合には、３時間授業を行った後に昼食となるだろう。さらに、中学校はエレベーターが無いため、階段で運ばなければならず、その負担の懸念もあると思う。

○東京２３区は自校方式給食の中学校が多く、１２時半くらいに４時間目が終わり、１３時まで給食、２０分の昼休みという学校がほとんどであろう。

○第１回の委員会で給食を教室で食べるのはそもそもどうなのかという話があった。新しい学校を見せるのであれば、色々と選択肢が広がるのではないかと思っている。今の方式で将来のことを考えがちだが、改善できれば時間の短縮や確保に繋がると思った。小学校のランチルームは、１クラス分の大きさしかなく疑問だった。将来的には、食堂のようなものができて、温かいものが食べられたら良い。造るのなら、現在の形以外も探れればいい。

○コスト面を考えないならば、小学校は自校方式で温かいものを食べさせてあげたい。中学校も自校方式が良いが、無理な場合は、デリバリー方式よりもセンター方式の方が良い。センター方式は、自校方式と同じように、大きな食缶が届いて生徒が教室に運ぶというイメージか。

●センターという工場で給食を作って、食缶を各学校に運搬するものになる。

○それを各クラスに分けて生徒が持っていくということであれば、作る場所の違いだと思うので、センター方式の方が良いのではないか。中学生の頃、給食を自分たちで運んだので、できないことはないと思う。

○ダムウェーターの設置面積は大きくないので、増築もできない話ではない。資料の最後

のページを見ると、座間市で給食センターを建てられる場所が少ないという点が気になる。給食センターは工場扱いなので、工業系の地域でなければ建てられない。小学校の自校方式は学校施設。大規模なセンターは建てにくいが、親子方式というやり方もあるのではないか。

○センター方式にすると残食率が上がる理由は、予備を作るため。食べきれないことが起きるのは仕方がない。私の住むマンションで、ここを買った理由が話題になった際、「給食がなく、弁当持参の自治体は居住する選択肢に入らない」、つまり、弁当作りは無理だから給食のあるこの場所に買うという人がいた。座間市で中学校給食をやると、子育て世代の転入が増える可能性もあるのではないか。

○中学校は、建替時に自校方式の検討ができるよう、幅広い方向性の方が良いと思う。センター方式で決めてしまうと、その可能性がなくなってしまう。

○中学校は、学校の中で複数校調理できる施設があっても良いのではないかということと、学校を更新する場合は、自校方式も選択肢として残したいという意見だと思う。その点について事務局の意見を伺う。

●弁当型から全員喫食への転換ということでは委員の方々の意見は一緒だと思う。あとは、どのような手法を取るかということで、全員喫食という方向性だけでも、本市として大きな前進だと思う。

○コスト面としてはセンター方式なのかもしれないが、学校施設として造るという意見もあったので、「小学校は自校方式。施設更新があった場合には一緒に更新する」、中学校は、まずは「全員喫食を目指す。センター方式等での実現を探る」ということで良いか。

○（一同）異議なし。

○教室で食べるかということはここで決める事ではないかと思うが、引き続き検討して欲しい。

議題３　座間市立小・中学校の児童生徒数・学級数の将来予測について
議題４　座間市立小・中学校の適正規模・適正配置の考え方について
・事務局から資料３、４に基づき、詳細な内容の説明

〇適正規模は難しい問題。子どもや地域の状態もある。座間市で一番大きい座間小学校は２４学級、ひばりが丘小学校は半分の１２学級。座間小学校は理科室や図工室など学校内の施設の割り当てを予備がない中で進めないといけない。あれだけの人数の子供が一斉に出るとすごいことになる。しかし、色々な大変さが、子どもの逞しさを育てるというのは肌で感じている。人間関係も幅広く築ける。クラス替えの際、人間関係を考慮して分けないと本人達にとっても良くない場合に、対応できるのは３クラスから４クラス。ひばりが丘小学校は、１２学級で全学年２クラス。融通も効くし、全学年体育館に入る場合もさっと入れる人数。座間小学校では、全校朝会のときも出入りを含めて何十分も掛かり、余計な時間も生じてしまう。小回りが利くという意味では１２クラスは良いが、人間関係の配慮はどうしても限られてしまう。教職員の仕事面では、座間小学校は教職員が５０人近く居るので、学校内の教職員の仕事を、１人１つずつ担当すれば済むが、ひばりが丘小学校の場合には１人２つ以上の仕事を担当しなければならず、退勤時刻にも差が出る。大きすぎるのも、小さすぎるのもメリット、デメリットがあり、３～４クラスが適正かと思う。１８学級から２４学級を目途とするのは、適正だと考える。

〇結論から言うと、中学校は提案のとおり、最低が１２学級。１８学級は少し多いと感じる。今の教育状況は変わっており、特別支援学級の学級数は増えている。規定では、１学級１教室を配置するうえ、数学や英語の少人数指導には各学年に１教室必要だが、その分を入れると一杯。中学生の体格は変わっており、大型モニターやタブレット保管庫も増え、教室にスペースがなく授業参観で保護者が入れない。多い時は４０人、特別支援の子が入ると４２人になることもある。建替の時には、適切な広さと適切な人数にして欲しい。

〇ここでは「大規模校・小規模校の良い点、悪い点」について議論して欲しい。学校に子どもが多すぎる、少なすぎるとどんな問題が起きるか、それを踏まえ適正な１学年当たりの学級数を考えて欲しい。通学距離・通学区域についても意見を聞きたい。

〇教員アンケートに現在の状況が書かれていると思う。例えば、１クラスあたりの人数が多くなったとしても、正・副の先生がつくなど、先生が増えるフォローができた場合に１クラスの人数や学級数を増やすのはどうか。

○教員が増えれば様々なことができると思うが、国や県の基準があって学校の自由にならないところが多くある。

○先生たちが働く環境が良い環境である方が良いと思う。先生たちの在り方を別角度で話していかないと難しいのではないか。

○教員の数を動かすことは難しい。基本的に日本の学校は、１つの学校の学級数に応じて自動的に先生の数が決まる。これを前提に話し合いを進めたほうがシンプルだと思う。今日の議論では、教員配置については横においてもらった方が良い。

○国の方針で、１学級何人というのがある。５０人学級から４５人学級、４０人学級、４５人学級と変化している。この変化は、何年毎に起きているのか。この場では１０年～、３０年後の話をしている。３０年後には３０人学級になると思う。中学校の先生方、保護者、小学校も３０人位が好ましいと思っている。

○１学級の人数は、１９５９年に５０人。１９６５年に４５人。１９８０年から４０人。２０１１年から小学校１年が３５人。最初は短い間隔で見直されていたが、その後は３０年掛かっている。１学級の人数がこの先小さくなる可能性について、事務局はどう考えているか。

●数年前に部内で話し合った際はまだ４０人学級で３５人になる話はなかったが、おそらく３５人になるのではという意見が出ていた。個別最適や子ども１人１人に対する教育には３０人学級は必須だと思うのでシフトしていくのではないかという感覚はある。

○「ある程度クラスサイズが小さくなった場合でも対応できるような程度の施設」を整備する方針は良いと思う。３５人学級になった時、東京の学校は増築ができない状況になった。ある程度、「小さくなる」ことも視野に入れた上での見通しを持って考えるのはありだろう。事務局に確認したいが、本日は標準学級数の下限が求められる議論になるのか。

●今日は結論まで行きつかなくて良い。下限なり上限なり一定の方向が出てくれば今後の議論に繋がると思っている。小・中学校で環境や現在のクラスの人数が違うので、小・中学校ごとにある程度方向性が出ればと考えている。

○一旦下限のあたりに焦点を絞って、共通の考え方が出せればと思うがどうか。

○現在、小学校は１学年２から４学級であり、１クラスの人数基準がある。それを掛け合わせると、市内で何校できるのか。同じように上限も求められる。これが数字で分かると、統廃合しないといけないのか、今の数字で残した方が良いのか見えやすくなる。数字だけの話ではあるが。

○１クラスの生徒・児童数の上限は分かるが、下限は市で決められるものか。

●決められない。

○アンケートをとっても、生徒数で決められてしまうということか。国の基準が１校１２から１８学級とある。座間市は、１学年最低２クラスだが、まだ大きい学校もあるので、恵まれた状況にあると思う。先生方も色々な学校を転勤するので、大きな学校の良い所や小さなところを経験している。学校は地域とも深いかかわりを持っているので、公的なものと複合化し、存続しても良いと個人的には思う。

○３から４ページの資料は、３５人で作成したものか。

●小学校は６学年分ある。３５人の場合には、半分くらいの学校を３クラス、半分が２クラスとなるように調整し、平均的な数字にしている。

○今の１クラスの人数はベストなのか。

○国の基準より少ない方が良い。現在、生徒の多様性に対応して、外国の子がお祈りのために学校を抜けたり、不登校気味の子などを対応したりする中で、１人の担任が４０人を指導するのは難しい。そして、定時に帰るようなことはできない。人数が少なければ少ないほど手厚くできる。

○現在は５学級だが、１クラスの人数を少なくして６学級とした方が良いということか。

○クラスの人数は決まっている。３６人児童がいれば、１クラス１８人だが、１人減れば１クラスとなり、クラスの人数は倍になる。少人数の学校は、このようなことが起こりやすい。中学校は起こりにくいが、１学年の人数が少ない学校だと有りうる。

○文部科学省のいう１２から１８学級というのは大した根拠はない。資料４の他市の状況を見ると、自治体規模が大きい他市はおおよそ２４学級となっている。私は、１２から１８学級は「全国的に見た場合」であって、座間市という小さい単位で見る場合、１学年２学級を市として適正規模であるとしたときに問題があると思っている。１つはクラス替えがしづらいという問題。もう１つは、３６人で２学級だといいが、１人減ると１学級３５人で学ぶことになり、子どもにとって環境の激変が起こる。先生は大変だし、先生の数も減らされるため、１学年２学級を適正とするのは危ないと思う。３学級だと激変リスクが減る。それを考えると、１学年３学級は有りではないかと思う。国の基準には意味はないが、ここで私たちが考えなくてはいけないのは、「何学級から何学級が良いと思う。その理由はこうである」ということを語れないといけない。その理由のうち１つは先生方から出ている話、また、事務局である教育部内でも学級数について議論が進められたようなので、議論の内容を紹介して欲しい。

●児童生徒の発達段階、人間関係の問題、学級編成の問題、学級経営等の課題を踏まえ、さらに「豊かな心を育むひまわりプラン」を実現する上でも、結論からすると小学校は３から４学級、中学校は４学級以上という意見が多かった。理由は、児童生徒の人間関係や相互の評価が固定化しにくい。１から２学級ではどうしても固定化してしまう。また、多すぎると人間関係が希薄になることが多いので、程よいところで言うと希薄になりすぎない。さらに、多様な意見に触れる機会が得やすい、学校行事や体育等の集団で行う活動が活性化される、そう考えたときにこの学級数が良いのでは、というのが児童生徒にとっての環境。別の視点から、教職員にとって望ましい環境は、多くの先生がいる中で、経験年数や専門性とのバランスが取れた職員配置がしやすい。２クラスだと、若手２人、ベテラン２人、女性２人、男性２人等の偏りが出てしまう部分があるが、３クラス以上だとある程度色々なタイプの教員を配置できる。それが、お互いの刺激や資質向上につながる。また、教職員の負担は、間違いなく学校規模によって違いがある。適正な人数によって、適切な配置もできることから、前述の学級数が良いのではないかという意見が出た。

○中学校については、国の基準と同じ。４学級だと、いわゆる５教科が学年で時間割が回せる。それよりも少なくなったり多くなったりすると、学年の掛け持ちをしなくてはいけないことが多くなる。小学校については、学年の担任の組合せとクラス替えという点から、３から４学級が良いのではないかというのが教育部内での意見だと思う。

○現在、２クラスの小学校は、ひばりが丘小学校のみか。資料を見ると、２０年後に２ク

ラスになる小学校が６校ある。

○３０人学級になると、この数字が大きく変わる。

○２０年後は難しいかもしれないが、３０年後には３０人学級にはなるのではないか。

○そうすると、必要クラスの数は今と変わらないということになるのか。

○数字は事務局に出してもらわないと、判断しづらい。

○３０人学級は本当に実現するかわからない。一方で、おそらく３０人学級が実現する前に学校の小規模化が起きる。学校施設として余裕を持った施設は必要かもしれないが、実際に今から１５年後くらいまでを見たときに、どう考えるか。少なくとも、１０数年の間には３０人学級にはならないと思う。先生が本当に足りない。中学校の３５人学級も現状ではかなり厳しい。この推計で、まずは建物の教室の数ではなくて、子どものいる教室が何学級あるのかという観点で議論した方が良い。

○この表では、現時点での全学年２クラスはひばりが丘小学校だけだが、２０年後には半数の学校が全学年２クラスになってしまう。

○議題４については、次回以降に持ち越しとしたい。今日決まったことは、プールの方針と給食の方針。適正規模については、次回以降に引き続き実施したい。